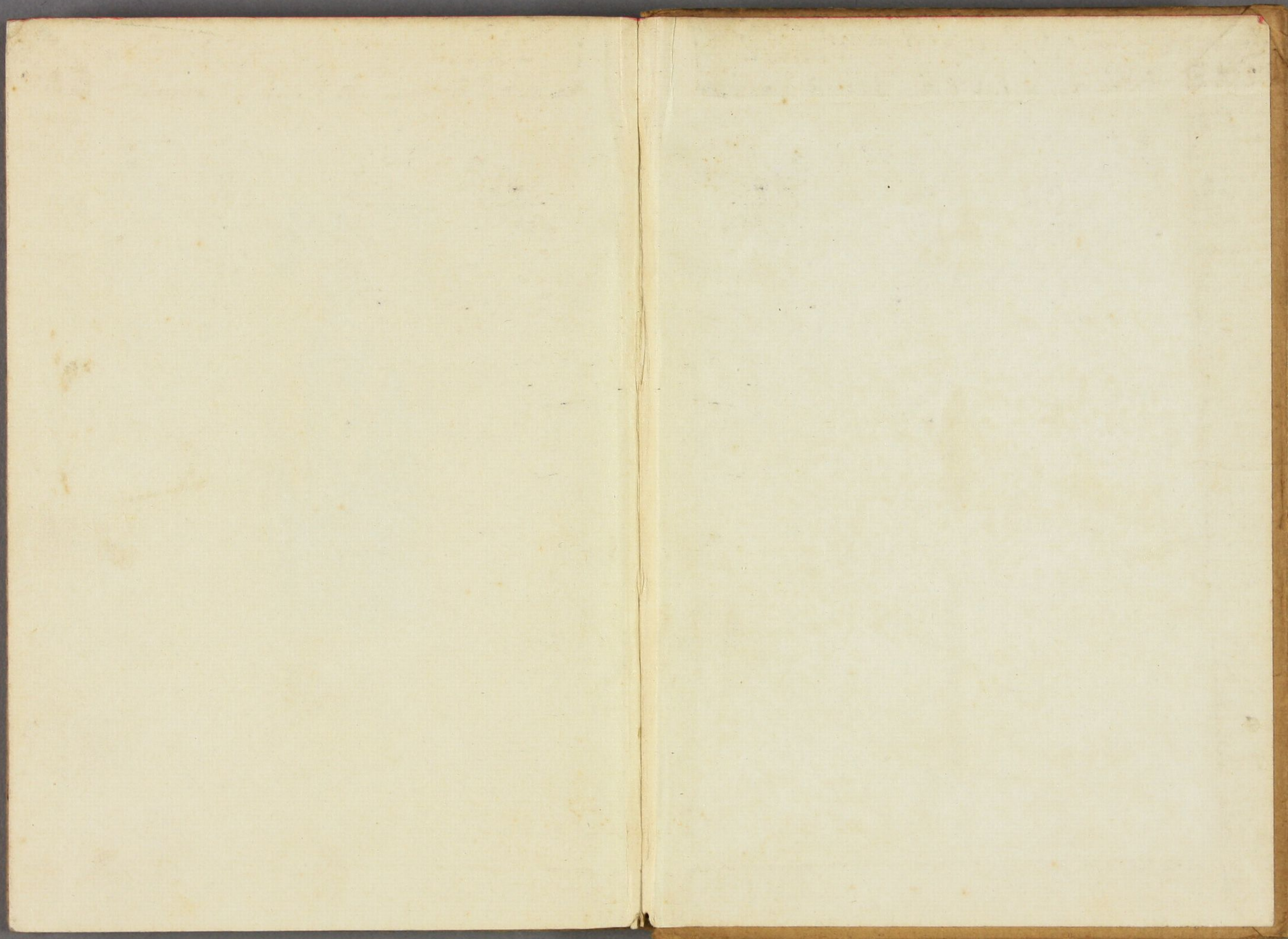


絹を仰ぎて 加藤介

K



梢を仰ぎて

加藤介春



近代詩歌叢書
第一編

近代詩歌叢書刊行の趣旨

ポルトレエル、バルレエヌ等天才の作品を出版せる「カ
ンタベリーポエツ」の故知にあらひ吾が詩歌壇に中心的
視界を作る第一流作家の最近傑作を集め出版して、詩
歌壇の黄金時代を紀念し、且つ遺芳を萬世に傳達せしめ
んとすること之れ本叢書の主目的なり、而して一時擴大
されたる詩歌の分野も、責任ある良書と定價至廉の美本
なきため、漸次限定せられんとする傾向明かになれり、
之れ吾が高貴なる詩歌壇の痛心事なれば、この傾向を既
往の黄金時代に轉向せしめんとする第二の目的あり、さ
れば本叢書が他の詩歌集と自に其の選を異にせるは自明
の理にして、定價の至廉、装幀の華麗、亦出版界の大驚
異たるべき事を信ず。

例言

◎此の集に収めた詩五十篇は、私の第一集「獄中哀歌」以前の作と、以後の作とである。「ストーヴの前」の中の十五篇が第一集以前の作で、「獄中雜詩」「くらき風」「虫の穴」等に含んだ三十五篇が第一集以後の作である。

◎第一集以前と言へば、私が詩作を始めてから大正元年十二月迄——大正二年正月から大正三年三月迄の作は「獄中哀歌」に收む——で、その間東京を去つて此の博多に來て以來、詩作をやめて居た數年間を除いても、年代は可成り古く、期間も可成り永い。

◎その可成り永い期間には、詩壇に色々重大な運動が起つた。口語詩と自由詩とは最も重大な運動で、此の二つは日本の詩壇に殆んど隔世の感あるエポックを作つた。此の集の中の「ストーヴの前」十五篇は、實は口語詩や自由詩の起きてからの作で、それ以前の作はどう考へても集に收める氣分になれなかつた。年代は明治四十年から同一二年頃迄で、吾々の同志が自由詩社と言ふを組織して「自然と印象」と題するパンフレットを出してゐた頃のやうに記憶する。

◎元來私は自分の作を、蠶が殻を剥いては棄て、剥いては棄てる様に片つ端から棄て、來た。私の手許に所謂舊稿は一つも保存してなかつた。今度急にその舊稿を集めるについても随分彼方此方の友人を苦しめたが、結局集つた所のは量に於て質に於て極めて僅少な詩篇に過ぎなかつた。私は漸く集つた贅しい舊稿の中から、前に述べた様に自由詩や口語詩の起つてからの作を選び、更にそれを選んで「ストロヴの前」十五篇を得た。これ以外に尙ほ當然收めねばならぬものがあるかも知らぬが、私は今は一つも記憶して居ない。

◎第一集以後の作は昨年の三月以降から十二月に至る迄の作である。「獄中雜詩」五篇は「獄中哀歌」以後に出來たもので、此の集に收めたのは前集の補遺になる考へである。總じて詩篇の配列は詩作の順ではないが最後の「虫の穴」に最も新しい作を收めて置いた。

◎第一集以前の作と以後の作とを一緒にした此の集は、私の思想感情の多少飛び離れた種類の物を集めた様な感じと、繋りの附けにくい流れと流れを一緒にした様な所があるかも知れない。それは以前の作と以後の作とが、その間に第一集を挟んである上に、可成り甚しい年代の隔りを有つてゐるからである。しかし私の

詩としての、又其の價值は別問題として兎に角私の人格の産んでくれた詩としての根源の流れは變つて居らぬと信じてゐる。以前の作と以後の作とが、共に如何に贅しいものであるにしても、各々その背景なりごん底なりには、私と言ふもの不變な姿が映つてゐると思ふ。之れは此の集に、遠く年代の隔つたものを一緒にした私を、いくらか慰めて呉れる所のものである。

◎それから一つ斷つて置きたいのは、今の私は今の所謂象徴詩を好まぬので、従つて六七年前の舊稿の中にあつたその當時の所謂象徴詩——それは今の所謂觀念的象徴詩と同じ流れである——を悉く排除した事である。私は此の集の中にその言ふ象徴詩の收めてない事を獨りひそかに快く考へる。

◎此の集を刊行するにつき詩人見東明氏の一方ならぬ御盡力を忝うした事を、茲に記して深く感謝する。

大正四年一月博多にて

目次

ストーヴの前

断層の上の夕暮れ	三
泡	六
山嶺の夕日と麓の悲しみ	九
桑の林のたそがれ	二
嵐	五
蟲の死	七
寫眞をとる前	一〇
ものうき室	三
ストーヴの前	五
乳房の痛さ	六
芝生の上	三
櫓の歌	四

暴風の信號	三七
眠たげに流るゝ夜風	四〇
光る植物	四二

獄中雜詩

見えざる影	四七
長きひと日	四九
獄僧	五二
蟻	五四
「我れ」と「命」と	五六

くらき風

夢を追ふ	六一
暗き風	六三
見えざる炎	六五

星を仰ぎて	六七
梢をあふぎて	六九
山彦	七一
黒髪	七四
處女の光り	七六
撫子の花	七九
戀の花	八〇
こひぶみ	八一
途上の女	八二
飽いた二人	八四
切れた絃	八七
燕の子	八九
父の眼	九一
灰降る夜	九四

虫の穴

さびしさ	九九
影と死	一〇一
殺氣	一〇五
近づくな	一〇九
敵	一一一
聞えぬ聲	一一三
わかれ	一一七
嵐に與ふ	一二〇
草の實	一二五
屋根の上	一二六
盲目の實	一二七
蠅の命	一二九
蟲の穴	一三三

スートヴの前

断層の上の夕暮れ

だっぴろい断層面の一つ、
その上を大膽にあざやかに夕日が照す、
投げつけられた色が燦爛とかゞやく。

ところ／＼に大きな高い木が見える、
その木には光りもなく弾力もなく
拔殻のやうな木である。

はるか向ふに白壁の家がある、

——かなしみがある、

そのかなしみは夕日で赤くなつてゐる。

一端に崖がある、
針金のやうにしてゐる、
そこへすべてが——光も音も悲みも押し流される。

地上にはまた、赤い大きな班まだらがある、
班には上をおふものも無い、
踏んで見給へ——音のしそうな血、光り。

濃厚な夕日の色、
何となく危険な光りが暫時しばし、
断層面の上を斜めにてらすと
影は影にかさなり、悲しみは悲しみにかさなる。

生ぬるい風が吹く、
(心の奥へ——方向なしに)
そして夕日にてらされて
立木はおもい隋力でうごく。

不愉快な空の色——
おもい光りが照してゐる、
崖の上は刺されて
断層面には悲しみがさまようてゐる。

泡

潮の鈍うしほいうねりの集まり重かさなる灣、
しづかな海の上の
しづかな夕暮、
夕ばえの濃きくれなるがゆすれ動く。

はるか彼方に漂へる悲しみがある
何の力に支配されてゐるか知らぬが
そのよるべなき悲しみは
小さい泡となり
蹠あし踏として流れてくる——
私は泡を見つめてゐる。

灣の上はいつしか暗く

泡はうち慄ふ——

『路がない路がない』と獨言ひとりごとく。

泡は今何事か考へてゐる——

路を捜そうとして

又あてもなく流れる。

よるべなき悲しみの泡——

やがて又もこの所へ

泡は來て立ち止まり、

『路が無い路が無い』と獨言く。

泡 泡 泡
! ! !

— 汝の路は暗くて行れ^{ゆか}ない、
— 汝の路はもう盡きてゐる。

山顛の夕日と麓の悲しみ

山顛に赤い大きな禿がある、
その上にどこからともなき
力ある光りが照す、
夕日が斜めにふりそゞぐ。

頂きはあざやかに
幻惑的なとろめきを起して、
くれ残る夕日の炎を
はね返へす赤い反射。

平たい禿の光りを上に戴きて
くらくなる山の麓には
うろくど人がさまよふ。

はるか向ふに白壁の家がある、
——かなしみがある、
力の抜けた湖水がある、
絶望がある。

山顛はあかるく匂ひて
しづかに日が暮れる、
ゆき迷うたかなしみが動けなくなる、
麓の林はふかき暗を抱く。

そのくらき麓に
うろくどさまよふ人々、
やがて彼等はうなされる。

かなしき麓の人々、
見よ、夕ぐれの顛律が
聞えぬ聲でうたをうたうて
麓の方へしづかに山顛を下りて行く。

桑の林のたそがれ

廣い桑の林がある、

その青い繁りが

濛々と煙つて

風は音なくながれ進む。

おどろきやすい桑の青い葉は

心配そうにゆすれ動く——

たそがれの悲しみが

林のなかをさまようてゐる。

煙つた青い色は褪せ、

空は死し、

眼の前もうすぐらく腐蝕し、

空中は灰色になり、

かゝやいてゐた悲しみも

次第に色を失ふ。

たそがれは悲しみである、

たそがれは死である、

たそがれは空しき靈魂である、

たそがれはうすぐらき抜け殻である。

そのとき深い林の奥から

戦慄が傳はる、

氣ちがひのやうに走る、
深い林のくらくなるにつれて
おごろきやすい桑の葉がうなされる。

人間の死によく似た瞬間が
つぎ／＼に起つてくる、
煙つた林の中には
かなしみが往つたり來たりしてゐる。

嵐

今夜もまた暴風の音がきこえる、
暴風は尙うなされてゐる、
私の傍そばに見たことの無い人が立つてゐる、
それが何んだが暴風のやうに思へる。
斯んな夜、私は胸に手を載せて眠る、
——その手を胸から放はなすことは出来ない、
そして毎晩おそろしい夢、同じ夢を見る。

暴風のどど／＼と言ふ聲が聞える、
ちつとそれを聞いてゐると

いつの間にか昨夜と同じ夢の方へ行く。

私は屢々胸に手を載せて眠る、

その手をとつて暴風がおそろしい夢の方へ導く、
私は呪はれてゐる。

虫の死

秋の日はだだひろい野に
血の滴るやうな光りを投げてゐる、
光りはおち葉をてり返してゐる。

虫はもう夕日が眼に見えず、

弱つた翼がうごかず、

——彼れはつるんだ、

激しい力が

瞬間の美を貪り

全身をふるはせた儘、

後の世もなくなり

ゆく末も見えずなり、
そして今ふかい底へおちてゆく。

彼れのたましひに落葉の薫りが泌み
木立の高い梢が悲しむ、

—— 彼れはつるんだ、

彼れの仕事は終つた、

そして今燦爛たる光りの中に
しづかに死ぬる時が來た。

それは人間の死と同じである、
それは又神の死と同じである。

見よ虫はしづかに死ぬ——
たましひと死骸の間あひだの
遠きへだたりを草の上に
空しく區劃くわくりて死ぬ。

死んだ後のさびしさを
赤い夕日がてり返す、
木の葉が死骸を弔ふ。

寫眞を撮る前

外にはしどくと降る

雨の音

けうとい雨のかげ。

空はしづかに、

ふかい心もまた

椅子の上にしづかに。

レンズが吸ふ、

私の青白い顔。

一點を見つめて立つ、
うらさびしい雨の室。

全身をめぐるは

神経の高い足音。

うごかぬ眼、

うごかぬ胸、

胸の深き底を今、
すひとらるゝ今、

椅子の上にはた
かすかな憂愁と

ふりそそぐ雨の音、

ものうき室

欠伸はうつれり—
ものうき室にありて
無限の弛るさと
ねぶたさを覺ゆ。

のびくと手足を
うちくつろげ
二人は腹這ひ、
あるひは仰向けになり。

窓なき室なれば

とちこめられて動かぬ熱の塊り——
むしかへさるゝ苦しさに
欠伸はうつれり。

うつれるは二人の
胸より胸へ
不思議の力の
ながるゝ故なり。

うつれども二人は
そしらぬけはひをなし、
折ふし胸の
汗を拭ふ。

ストーヴの前

夜の室のストーヴのあたゝかさ、
とろけるぬくもり、
強烈な刺戟の爲めに
吾等二人は全身を絶えず動かす。

暖爐の光りが漸次に
吾等の皮膚を興奮させる、
皮膚がいちめんに赤味ざす。

白い手が人知れずしづかに
私の觸感を吸ふ。

——眠らぬやうにと叫く。

二三時間後のことである、
そして吾等は
すべてを知りつゝおどろき恐れる。

全身におもい隋力の流れる
その苦しさに
二人の眼はふるふてゐる。

くれなるが投げつけられた、
強烈なぬくもりを抱いて
心がゆらめく、

——酔ひごれの様に——

一端に、
盲動的に、
すべてが集る。

、れなるの刺戟の爲めに
くらしい室で
暖爐の明りをたよりにして
心と心がうなづく迄。

乳房の痛さ

お前はまたもわたしの乳房を
力のかぎり両手で
握つてゐるが、その痛さ。

そゝがれる力の痛さ、

——流動體のお前が
乳房にもたれるそのおもさ。

ゆたかな頬笑みをうかべて
やわらかにさゝやく
お前の聲はふるうてゐる。

ふりそそぐ暴力は
わたしの觸感を吸ひ
全身をいら／＼させる。

弾ね返へる乳房の高いふくらみを
珍らしそうに握つてくれる
——忘^ずられぬ戀しき痛さ。

きり／＼と男の力の泌む
乳房の痛さ、
わたしはそれを堪へてゐる。

興奮した乳房の上に
大膽なたましひのとりめきが
痛さにつれて生ずるまで。

芝生の上

芝生の上には露を敷いた如く
撒きちらされた強い匂ひが
消えもせずしばらくとかいやり、
よこたへた二人の身の痕、
芝生の凹みは未だ弾ね返へらず。
長い日のこゝろよきあたゝかさ、
全身のくすぐられうごくを
互ひに見た芝生の上。

圓い芝生は花をもてかこまれ、
その花の光りが
てりかへす二人のたましひ。

全身をゆくところまで
行かしめる、狂はする
限りなき此の歡樂。

心のそこをたがひにすひ、
次第に強く握りしむる手。

香水の亂情なにほひ、
むづかゆき麝香の塊。

芝生の上には尙
残れる歡樂の痕、
きえ去らぬ床の凹み。

二人の胸を引きつけて匆惶あわただしくなし、
またおどろかす異なる身の異なるにほひ。

忘れぬ強きにほひが
赤い花の圍める芝生に移る、
それは二人の媚び合ふたとき。

櫓の歌

はるかに遠く
風の絶え間なく
空しい心が聞く。

ゆらめける思ひが
ものゝ底に達した時、
はじめて聞く。

木立からいつさんに
黒い櫓が出づ、
走る、

その音を聞け、
さびしい鈴の響を聞け。

ふかい木立も廣い野も
別な世界の様に
うすぐらい影におほはれ、
とちこめられた心が
ゆくべき路をうしなうて
しづかに暮るゝ夕べ。

そういふふ夕べ
たゞ一つ生きた力が
あわたゞしげに、ものものしく。

はるかに行く櫓の影、
その疾駆
いつさんに――

日はもうくれたのに
鈴の音、
櫓の影――
櫓は尙野から野へ、
てりかへす雪の光りを分けて走る。

暴風の信號

褐色の雲、
褐色の空、

海岸の長い林に、
高い砂丘に
そりそゝぐものくしい影。

遠くはるかな海には
てりかへす雲の危険な光り――
水はくらく影れり。

うすぐらい底へ静かに、
ながれて行く生温き風。

——おどろき易く、

——あわたいしく、

——又急に騒しく、

海岸の信號臺には
管内全部を警戒すと
大きな赤い旗。

褐色の雲、
褐色の空、

暴風が今やきたると

おどろく船、

おそるゝ砂丘、

わななく海岸のくらい林。

——見よ鳥は陸の方へ逃げつゝあり。

眠たげに流るゝ夜風

どこからともなくざわめく夜風は
ゆるやかな顫律を起して
己れが行衛も知らず
ねぶたげに流れてゐる。

はるかな病院の白壁へ、
高く尖つた屋根へ、
ちからの抜けたくらい野へ、
おどろきやすいユウカリの青葉へ、

——あたくしがいしづかな方かたを捜さがりつゝ

空にまたゝく青、白、赤の星へ、
林へ、胸へ、たましひへ、
ねぶたげにながれて居かる。

光る植物

どこからも光りはさゝぬが
またも強くはげしく
植物が光りはじめる。

雨あがりのしづかな空の下、
光りある空気の中に
てりかへす心と植物。

うなだれた八重の牡丹は
次第に上へ向く、
ゆるやかに弾ね返へる。

堅くとちた胸も
おのづから開きて
のびあがり動きたましひ。

白い石造の家では
日光を入れんとして
三階の窓を開く。

つよい空気をしづかに吸ひ
潑漑として光る植物、
燦爛たる生氣。

そのちからある光り、
その快こころよきつよい光り。
――見よ植物はずん／＼生長かり居れり。

獄中雜詩

見えざる影

わたしを惱ます見えざる影が
五器口を出たり入つたり、
わたしの傍をすこしも離れず。

いづくよりきたるか知らねども
あるひは這ひ、あるひはよぢ上りて
心の上をすこしも去らず。

見えざる影が激しくうごきて
織りいだすくらい縞は
わたしの前にいくつものつらなる。

妄念か、心の迷ひか
たゞくらしき見えざる影が
こそくくとゆき來す。

わたしをなやます見えざる影の
見えざるくらしき渦は
そこ此所にいくつもうかびて。

いづくよりきたるか知らねども、
五器口を出たり入つたり
絶えずわたしにつき纏ふくらしき影。

長きひと日

青ざめし山櫺の繁りを
格子の窓からちつと見つめて
うすぐらき蓆むしろの上に座る。

青ざめし繁りはものうげに
病人の手の如くだらりと下りて、
くらい心へ弛たるき影をうつす。

わたしの身體からだは暑さに溶けかゝる――
山櫺の繁りをてりかへす日の光りが
心にうかびていらくさせる。

わたしは『生』と『死』を考へる、
家根裏に巢喰へる蜜蜂の
ものうさうなりをちつと聞きながら。

獄の日の長くつゞくにつれて
弛き心をきり／＼と引きしめる――

『しやんとせよ』
かう叫ぶ。

此の儘にてもよし、死んではならぬと、
遠き房の光らぬ屋根をみつめて
その屋根に話をするがごとく獨言つぽ言く。

青ざめし山櫓はだらりと下れり――
その弛き繁りに向ひてすら
いつまでも死んではならぬとおもへり。

獄僧

わたしの心のまはりをとりにくく
見えざる暗き影の中から
あらはれしやうな獄僧。

獄僧は何の足音もせずちかづきて、
見えざる影のいつの間にか
異様の形となりし如し。

何のためにきたるや知らず、
わたしの顔をぢつと見つめし儘、
いつまでもたゝずみて動かず。

多くの囚徒に向ひし
うすぐらき眼の光が『汝悔むよ』と
わたしの顔に刺さる。

わたしはつひに顔を上げず――
毎日のやうに來りて
わたしを責むる無言の獄僧。

されごふたゝび影の如く、
しづかに歩み去れば黒きうしろ姿を
見送りて最早何のかゝはり無し。

蟻

蓆の上におつと座れる
わたしを何とおもふたか、房の外から
うる／＼ときたりし蟻が這ひ上る。

長く延びた脛の毛、

獄の日のいつまでも續きて

延びたる黒き毛をおし分けながら。

わたしの身體を餌のごとくおもひて

這ひ上る小さき蟻、

蟻は切りにわたしの匂ひを嗅ぎながら。

八月の日のてらくと壁を照りかへし
或ひはまた地面を燬くけだるさに
わたしは蟻のなすが儘になさしめる。

うすぐらき蓆の上に座す

弛き身體は何か別なものに

次第に變つてゆくが如く、

そしてその弛き身體を

這ひ上る蟻のむづ／＼しさも、

わたしの身體の事とはおもへず。

『我れ』と『命』と

それが何んであらうとも
かたく握りて放さず、
てのひらの痛くなるまで握りしめる。

どこから来たか知らねど、
わたしの深い心の底を
てりかへす光り。

うすぐらき獄の中の一日の
次第にくれてゆくはかなさに、
ちらとうつりし物の光り。

『我れ』といふ太きあるものに、
あちこちをさまよひ居りし
『命』がふとめぐりあひし時。

わたしが最早泣きあきし時、
どこから来たか知らねど
うすぐらい房をてりかへす光り。

てのひらに握りしめし間あひだに
如何なる色に變るか知らねど、
いまでもその光りをはなさず。

く
ら
き
風

夢を追ふ

心はみはてぬ夢を追うて、
暑さ日向へ走り出づ、
その時わたしの眼は覺めたり。

身體からだの所々ところどころに残れる眠たさが
ともすれば影のごとくひろがりて
心におほひかぶさらんとす。

最早眠りを欲するにはあらねど
いまだ覺めず——すべての生物が
夏の眞晝の空しき弛だるさに。

みはてぬ夢はつきぬ名残を
赤き日向にふりすてて消ゆれば
何のあとかたも残らず。

やをら起くれれば寢覺めの青き顔が
蠅取塚の生ぬるき水にうつりて
空しきわたしの所在あきを示す。

蠅取塚の蠅の黒き死骸がうてたく、
しづかに起きて夢を追へば
その夢もまたうてたし。

暗き風

うすぐらけれども廣き室むろなれば、
その片隅のどこか見えざる所に
風のうまれる所あるべし。

いづくよりきたるか知らぬそよ風、
一くさりそよると吹きわたれば
ふと立ちとまりて消ゆ。

そよ風の吹きしあどは
うすぐらき空虚となりて
むなしく廣きもこの室にかへれり。

うすぐらきそよ風は
とり逃せしたましひのありかを
あてもなく捜す拔殻。

氣まぐれか發作かしらねども、
見えざる風のふつと消ゆれば、
もうそれを追はんすべもなし。

見えざる炎

つめたき夜の露臺に
くらきうれひが浸みわたりて
もえあがる見えざる炎。

くらき心の中より抜け出でて
青ざめし星へ返る炎——
星は悪夢にうなされ居れり。

見えざる炎のすぎゆくとき、
うつることもなく映れる
影なき影の長きつらなり。

うれひは鉢の薔薇をおほひて
しづかなる夜のふかき底に
濡れてひそめる暗き心。

生物の心とはいつの間にか異れる
空しき心がものうげに横臥し、
やがてまた飽きておき上る。

そのとき見えざる炎は
つめたき夜の露臺をつたひて
あをざめし星の在所へかへれり。

星を仰ぎて

つめたい心には何もきたらず——
かゝやける星は一散に
私のくらしい心へ
おりて來そうに見ゆれども。

星は高くはるかに——
私の前に立てる長い樹木の
梢の先きも眠りてとゞかず、
星は高き空にさびしくつながれて。

星の光りと私の心と

たがひに遠く世を隔てて
眞上と眞下に。

ふかき心の底へ

うすぐらい夜の濕りは

うごかぬ風をつたひて出入し、

憂愁となりて十重二十重にとりまく。

つめたい心は慄ふ、

やる瀬ないさびしさに、

空より何もおりて來ぬむなしさに

星をあふぎてうち慄ふ。

梢をあふぎて

いつ迄もうれぬ實が、

木の上に一つ残れり。

いつ迄もうれず光らず。

何の望みもなければ

またおもひかへして梢にととまる。

幾度も只ひとおもひに

おちんと下をのぞき見ては

そのおそろしさに慄ふ。

くらき夜は何ものかに
うなさるゝうれぬ木の實、
それによく似しわたしのくらい心。
うれぬ實とそれによく似し心が、
いつまでも木のうへと木の下に。

山彦

わたしは二つの心をもつ、
第二の心は木立の底のくらい梢に、
うごかぬ鳥のやうに止とまれり。

二つの心は遠く離れて居れども、
その心から心へ
一列につながりゆく聲と影。

影はほのかに匂ひて
見知れる聲を追ひ、
とざせる木立のくらがりを往き來す。

木立を出でぬ鷗巢、
それによく似し第二の心が
聲と影とおくり返へす。

第一の心が呼ぶにはあらねども
くらき底から見えぬ器械に
せり出さるゝ聲と影。

聲は鎖の緋のもどる様に、
急いで以前の心へ
『我れ』そのものへ。

『我れ』その物の妾めかけの様に、
木立の底に第二の心が
注意ぶかくつゝましやかに接む。

黒髪

机の上によこたはれる妻の髪^{の毛}、
それを指先きにつまみとりて火鉢に棄つ——
黒き髪は慄へり。

ペン軸にまつはれる黒き抜け毛、
それもそつと拾ひて
火鉢のなかへ投ぐ、何の音もせず。

畳の上にもおちし髪^{の毛}、
火鉢にすつれば火無き灰の
白きおもてを未練そうに這ふ。

わたしの心にも妻の抜け毛が
幾筋となくちらばひ居れども
次第に馴るれば何のかゝはりなし。

片つ端よりつまみとりて火鉢の底へ、
つめたき灰へ
それはわたしの役目の如く——

實^ひに何のかゝはりなければ、
火鉢にすてし妻の髪^毛、
黒髪は無慙にも空しく慄へり。

處女の光り

わたしを威壓する處女の光り、
あなたの眼にある處女の光り。

どんな影がおほひかぶさつても
それを空しくはね返して
いつもくもらぬ光りを有つ。

實にそれは處女の光り、
ダイヤのごとき價值ある處女の光り、
あなたの眼にある處女の光り。

どんな魔法もかゝらず、
いみじき賢さに
魔法が空しく逃げいだす。

如何に近くそばにきても
空の星の如く
永久に手はとつかず。

それとなく躡り寄る時、
わたしの黒い心を
はぢきかへす強い光り。

どんな暴風もうばひ去り得ぬ、

あなたの眼にある處女の光り。

撫子の花

撫子はのこりすくなくなりたれば
もう摘むなかれ、

撫子はくれなるに狂へる花なり。

花をして心ゆくまで咲かしめよ、

撫子はふと燃えあがりてまた消えんとする
さびしき少女の戀ひごゝろ。

それがつひに實となりて種子のとぶ迄
摘むなかれ——その小さき撫子は
さびしく咲けるまことの戀の花なり。

戀の花

ほのかに咲けるうす紫の花なれば
夢見る少女の眼まなこに似たり、
されば空のはるか彼方あなたより
その花を見つめて飛びくる小鳥あり。

ラヂウムの如く放射する花の香なれば
捕へ難き少女の心に似たり、
げにその花は夜の夢にうつりて
あやしく狂うて泣きいださんどす。

こひぶみ

はづかしければうち棄てし儘
知らぬ顔して逃げかへりし艶あでな戀ひぶみ、
人知らぬ血汐のゆらめぎは
おそろしからずや、夜よとなれば鳴る。

途上の女

おちつかぬわたしの眼よ、
おそろしくひかれる眼よ。

わたしはいつも出會ふごとに
その白い顔を

『處女かどうか』とうたぐり覗く。

わたしはその女に限らず、
出會へる多くの女の顔を
『處女かどうか』とうたぐり覗く。

おちつかぬわたしの眼よ、
おそろしくひかれる眼よ。

飽いた二人

幾度も接吻するけれど
何も感せぬかなしさに
罵り合ふ。

お前の顔のすこしも赤くならぬ
もの足らなさに
つよい煙草を腹立たしげに吸ふ。

煙草を吸うてゐる間あひだの
さびしい心にさすくらい影、
枯木に似たる影。

つめたい地平線の様に
ちつと寝てゐるお前を
わたしは強く踏みたくなれり。

昔は、そつと突いてやれば
指先きにか知らねどついてきて
わたしの心に甘へかゝりし白き靨。

その靨さへ今はあとかたもなく
硬こばりしお前の頬には
うすぐらい太き影をうつせり。

かくて二人はいつも罵り合ふ——
たがひに飽いたお前と私、
罵り合へば別々に泣き出す。

切れた絃

氣まづくなりて弾く
三味の絃のブツンと切れし
夜。

あきくしたる重い心を
突きやるやうにブツンと切れし
三味の絃のものうさ。

何故かしらねども
たゞ獨りゐて知らず知らず
きまづくなりし心に弾く三味の絃——

白ちやげた心に
切れたる絃のつめたくなりて
横^{よこたは}る夜。

腹立たしくもあれば泣きたくもあり——
切れたる絃を
結ばんともせず。

その儘に放^{ほう}り置きて
いつ迄も只獨り
ちつとながめる夜。

燕の子

余りの可愛らしさに巢からとりおろし
てのひらに載せた燕の子、
こんなふとつたとそれを家族に示せば、
皆の者がまあと驚きしてのひらをさしのぞく。

燕の子はてのひらにものおそろし氣に
くるんとすくみて小さき眼をかゝやかし、
とみかうみおちつかずうち慄ふ。

私が室ぢゆうをもち廻りし時不意に飛ぶ——
燕は小さい翼のさきを尖らせて

窓外の明るさを追ふ。

燕の子はとび去れり窓を抜けて
だゞびろき宇宙へ、
已れの自然へかへれり。

おう燕の子、そのとび馴れぬ翼は
よち／＼と歩くがごときあやうき駈りを
はるか彼方へつゞけて。

燕の子はもう居らず宇宙に消えて、
わたしのてのひらには痕型もなし。

父の眼

父は死せりき——
されども父はつめたき眼まなこを開きて
何かしきりに見つめ居れり。

鈍く開きしまゝ動かず、
たましひの抜け去る時
とちわすれたる空しき眼め——

死せる父の顔には
うすぐらき影がおほひかぶさり、
所々ところどころにおち葉のごとき痕がううかべり。

此の世にありといふも無しといふも
たゞ空しき父の死骸、
されど尙その眼はとぢず。

眼蓋まぶたはおもく動かず、
死せる父の眼は
尙ほ何か見つめて居たきにや。

おおうすぐらき死せる眼、
それをしづかにとぢてやりし時
父は死せりき。

それは子として私のすべき事か
無慙にも——そして悲しや、
父はつひに遠く死せりき。

灰降る夜

なまあたゝかき空の何所か知らねども、
くすぐられる苦しさに、
あまへるし風がふとくるはしく吹き下す。

なまあたゝかき空のくらがりから
赤き灰が無数につらなりて
もう飛びつかれて地へ下りる、降る。

赤き灰の幾重にも閉せる
カサ／＼しそうな夜のくらき空から
したとりおつる太息あり。

なまあたゝかき風は濁りて重く、
節々の抜け去るやうに
氣だるく吹く。

十二日午前十時、
櫻島爆發すとの號外に
うちおごるきて仰向ける心の上へ――

ちつと垂れたるくらい木の葉へ、
或ひはまた水の白き流れへ、
ガラ／＼したる異様の光りを降らし塗る。

うすぐらき空にうかべる
赤き灰の影は熱くなりて
溶けかゝる。

そのうすぐらき空をあふぎ見れば
息苦し——もうとび疲れし
おもき灰は音もなく降りつもる。

虫の穴

さびしさ

胎内のうすぐらさに、
眼を堅くとち居りしさびしさは
今も心の底に残れり。

ぼつちりと獨りひそみて
たゞ己れのみふとりゆきし時、
始めてうけし生のさびしさ。

その後いつしか姦し戦ひ
或は盗むやうになりても
そのさびしさはをりふし返りきたる。

その時獸ともはた人間とも
わからず得ざりし姿は
今尙残りて獸の如き我等。

今尙獸とおなじ心の
黒きかたまりとなりて潛む、
おおそのさびしさよ。

姦し戦ひ或は盗めども、
いつまでも變らぬ
胎内にありしとき受けしさびしさ。

影と死

影はたましひの窓をさしのぞく――
多くの人の集つてゐる時でも
各々の影として各々のたましひへ
しづかに歩みきたる。

影はたましひの前に立ちふさがる、
その時たましひは眞暗くなり、
その時空を飛ぶ小鳥は路を失うておちきたり、
木の葉はくらしい宇宙にぶら下つた儘漂ふ。

その時花は花冠も花粉も暗くなり、

たがる、水は已れの行く方がわからなくなり、
人間は眼を開いてゐても何も見え
その時『すべての物に死が来た』と靈魂が叫ぶ。

すべてのものは已れの姿の見えなくなつた時、
己れの路の消えうせた時、
心細さに『もうおしまひだ』と鬱ぎ込む——
影はしづかにたましひを包む。

影は眼に見えぬつめたい炎である、
何も燃えずに立ち昇る煙である、
影はくらき無限の風である。

影に觸れるな、
磁石は鈍つて北をささなくなり
時計の針は重つた儘うごかなくなる——
影はしづかにたましひを包む。

影はあらゆる物にぶつ附かる、
『俺れは高い空を飛び
深い地のどん底へも入る』と
影が言ふ。

近づくな、影はたましひの窓をさしのぞき
たましひを真暗くする——
たましひの灯りを暴風の如くおしよせて吹き消す。

影はくらい無限の風である、
たましひからたましひへわたり歩く、
近づくな、
影は無限の死である。

殺氣

青ざめた廣い野原の空氣が
きり／＼と引きしめられ
次第にかたく張りつむる時。

私の周圍におちた影の
音無き黒いリズムが
大きな流れとなつて廣い野を横切る時。

しづかな眠りがふと眼を覺して
何もなき深い底へ逃げこんだ時。

私の周囲に多くの群れをなし
或はまた長い列をつくつて
影が影を追ひゆく時。

赤い火花が火花とつらなつて
私の周囲をぐる／＼と廻る時。

見えざる『命』がふかい底から
おしあげられて『我れ』といふ太い或る物に
はげしい力でつながらる時。

私の前の廣い野原に
時ならぬあやしい影りが

私のくらい心から出で映つた時。

その時『我れ』と『命』とが光りを強めて
青ざめた廣い野原に
ざら／＼とか／＼やく殺氣――

私が何物かを殺したくなつた時、
何故か知らず只手にかけてんと思ふ時、
人知れず刃物を握りしめた時。

『命』の中から何か知らず駆け出し、
やがてまた『命』へ歸つて来た時。

引きずりゆかんとする運命を
ふりはなして『命』を堅く守る時——
それは青ざめた広い野にたゝずんでゐる時。

近づくな

かゝやける黴菌に

近づくな

それはおそろし。

放射せる鋭きラヂウムに

觸るるな、

おそろし。

くらい影から吹きくる風にも

近づくな、

毒をそゝぐ。

匂へる赤い花も
命をふかい底へ誘惑し、
油断すな、汝の戀人にも――
汝の命は呪はれてゐる。

そこに泥棒がゐる、
騙りがゐる。
人殺しも居る。

命は呪はれてゐる、
すべてのものに近づくな
それはおそろし。

敵

『ここに俺達と違つた種族がゐる』と
地面べたを這へる虫が言ふ、
それは人類である。

『ここに俺達と違つた生物いきものがゐる』と
ゆくりなく出會うた獸が言ふ、
それも人類である。

つぎに鳥は高い空から見おろして
『かしこに別な種族がゐる』と言ふ、
それもおなじ人類である。

彼等は何れも人類を見つめた、

『何んといふ不気味な生物だらう』と
おそれ戦いた。

『何んといふ多数な種族だらう』と
おどろいて眼を見張り
ちり／＼に逃げて行く。

『油断すな、おそろしい敵がある』と叫く、
或るものはうらめしそうにふりかへり見て
『今に見ろ征服してやる』と叫ぶ。

聞えぬ聲

吾々人類がちつと胸に手を置いてゐる時、
『おお、お前は何か考へてるんだねえ』と
青い木立が垂れた葉蔭をそよがせがら尋ねる。

『今人間が不思議な事を考へてゐる』と
高い梢にとまつた小鳥が
はるか下を見おろして言ふ。

『それは死さ、
もうあの種族は永いこと生きてはゐない』と
白い星が答へる。

『お前の顔は獣によく似てゐるよ』と
地面を這ひながら虫が言ふ、
虫は吾々人類をいつも下から凝視してゐる。

「成る程お前は大きな身からだ體をしてゐる』と
ゆきずりに出會うた
さまざまの動物が我々を譽める。

『お前は俺達と違つた生き物に見せん爲め
俺達と間違はぬ様な服装をしてゐるんだねえ』と
それらの動物が後うしろをふりかりて見て尋ねる。

吾々人類がちつと胸に手を乗せてゐる時、
うすぐらい顔をして佇んでゐる時、
椅子にもたれて一心になつてゐる時。

『お前は青い顔をしてゐるよ』と
高い木立が葉蔭をそよがせながら言ふ、
『あの種族は死を考へてゐるからさ』と空の星が答へる。

吾々の耳には何の聲も聞えない——
どんな大きな聲でも
聞えぬ聲がそこ此所に發せられる。

『もう長いこと生きてはゐないんだ』と

白い星が吾々をみおろして囁く、
『今度は俺達と同じ動物に産れるんさ』と獣が言ふ。

わかれ

それは人類のうまれざりし前、
とある所で二つの影が
ゆきずりに不意に出會うた。

二つの影は出會うたけれども
たがひに見知らぬ故
心もとめず無言にわかれた。

そして各々東と西へ
遠くはなれた世界に行かんと、
地平の果てへ路を急いだ。

二つのかげはくらい地平線を越へて、
互ひに見えずなる迄行つてしまふた。

東と西とが無限に離れてゐるやうに
二つの影は遠くわかれた、
そしてふたゝび會ふ期はなかつた。

それは當てもなくさまよふ影と影、
又それは東と西にある無限の空虚。

人間のうまれぬ前のことであつたが、
そのかなしみはいつ迄も續いて

今尙東と西に二つの影が残つた。

嵐に與ふ

嵐よ。

眼にも見えぬ影も有たぬ嵐よ、
何のかたちもなきくらい唸りよ、
青ざめた木の葉は慄へて落ち、
ほのかな灯りは打たれて消え、
人々は眼を覺して『オウ………オウ』と叫ぶ、
けれどさびしい嵐よ。

お前は虚空から虚空へ
強い力を張りわたし、
お前の見えぬ姿が

地上の深い眠りやしづけさや
たなびける影や、たましひを脅かす。

お前は蹂躪し、搔き亂し、怒鳴りつける、
うち殴り、おし倒す、
おこり患者のやうに慄ふ、
どこにもない大きな力が突出し
狂奔する——
お前はおそろしい眼に見えぬ力だ。

お前は人の居らぬ遠い海から來た、
小さい島の木立の上を見おろしながら通つた——
そこにも人は居なかつた、

そして今俺達の居る國へ來た、
お前の長い道中はどんなに淋しかつたらう。

お前はくらい國から來た、
何を探しに來たか知らぬが
うつりかはり現はれる暗い地平線を
いくつもいくつも越えて來た、
その時お前の道中はどんなに淋しかつたらう。

お前は今東へ東へと吹く、
お前はくらい唸りを續けて
氣ちがひのやうに駈つて行く、
何んといふ淋しい道中だらう、

お前の力は無限に東へ流れるけれども
そこには無限の東がある、
そしてお前は以前のくらい國へは歸られぬ。

『俺れは只どこまでも東へ駈る
俺れはあのくらい國へ歸らうとは思はない』
お前はかう言ふだらう、
果敢ない命よ、
疍癩持ちの流浪者よ。

地面^{ちべた}へ獅噛みつき、かちり附け、
お前の力を地へ深く喰ひ入らしめよ、
大きな穴を地のどん底に穿て、

そしてその穴の中に虫の如く永久に棲め。

嵐よ、

お前はたゞ吹く、

たゞ上を流れすゝむ、

命知らずの疝癢持ちよ、

さびしい氣紛れな流浪者よ。

草の實

野原を通りて家にかへりし時、
わたしの着物についた草の實。

『お前はどこへ行く積りだ』と、
その草の實にとへばかなしも。

屋根の上

高き屋根の上に
名も知らぬ草が赤き花をつけ、
やがて眼に見えぬ小さき實を結べり。

高き屋根の上から、
その小さき草の實は
いづくへ飛ばんかと方々を見廻し居れり。

高き屋根の上に
命は躍動し、
草の實は宇宙へ飛びゆかんとす。

盲目の實

眼の見えぬ種子のあはれさよ。
たんぼぼの白き實は
うかべる風のまに／＼くらい室へ――

眼の見えぬかなしさに命のすゝむべき
己れの路を知らず、
白き實はあらぬ方へまよひ來れり。

このうすぐらき室へ來りて
いづくに生きんとするにや、
たんぼぼの實は疊の上にとまりて動かず。

命はここに延びんとするらしく、
空しきたんぼほの實を
指先きにつまめば白き羽根を恐れ慄はす。

されどその實を窓より放ちやれば
また空しくも風のまに／＼
いづくへか飛び去りて影も見せず。

蠅の命

膝にとまつた蠅、
ホイとさらつて引つ捕へ
てのひらに握りしむ。

てのひらを強く握れば
ブブンと拳こぶしの中から
蠅の呻く聲が漏る、
小さき命はくるしそうなり。

てのひらを少しゆるめてやれば
むづ／＼と中を這ふ、

蠅の翼はわななき居れり。

それを又強く握りしむれば

ブブンと又呻く——

拳こぶしを耳に當てて

そのくるしげなうめきを聞く。

おもしろい蠅の命、

一息に握りつぶすはわけなけれども

それも何故なぞが残りおしければ、

ホイと捕へた蠅の命、

いつまでも翺りものにする

おもしろい蠅の命。

虫の穴

或る日わたしは庭を散歩せし時、
地面ちべたにふかき虫の穴を見出せり。

地面の穴のうすぐらき底から
そつとのぞける虫の髯だらけの顔――
奇怪なる生き物が少し見ゆ。

虫はちかづく人のけはひに
おどろきおそれてふかき底へ逃げ、
くるんとすくみて外をうかゞふ。

いつの間にか穴を掘りて、
ひそめる太きいのちあり。

或日その穴をのぞき見て、
強き真面目まじめな心になれり。

真面目な心をちつと抱きて、
虫の穴のほとりを
獨り歩いて泣きたくなれり。

大正四年二月一日印刷
大正四年二月五日發行

定價三十五錢

著作者 加藤介春

發行者 川上耕雨
東京市牛込區矢來町三番地

印刷者 篠田玉三
東京市神田區西小川町二丁目六番地

不許複製

發行所

東京市牛込區
矢來町三番地

合資
會社

金

風

社

近代詩歌叢書

第一編

加藤介春氏著

詩集 梢を仰ぎて

新型美本
百卅三頁
定價卅五錢
郵送料四錢

その胸心を廣く持し。心性を自由に開きて自己と面々相接する生活に滲透或は吸引して生くる者の藝術には叩いて黄金の音あり、觸れて血の温みを感じずべし。之れ著者の生活態度にして、やがて藝術境の真相なり。著者今や「獄中哀歌」前後の作二百餘篇中より傑作五十餘篇を選出して本集をなす而も歌つて空想に入らず、咏みに夢裡を彷徨せず、飽くまで現實に終始透徹して眞率を極めたり。その哀切なる實感と、痛烈なる生活味とは、著者獨特の強盛なるリズムに塗りつぶされて、今や新詩の高潮を示せり。生き者の心性に觸れんとする者は、來つて本集を繙き心讀三味すべし。

近代詩歌叢書

第二編

歌集 石ころ

士岐哀果氏著

新型美本
百五十頁
定價卅五錢
郵送料四錢

「予が歌は街上の石の如し。これをいとほしむ心
とにくむ心と相錯綜して、靴にて蹴りながらも潜
然として泣かまほしき気分にもなれば、又哄然と
笑殺せまほしき心ともなる。——小さな石ころ
大なる石ころ、噫一路はてなき我が地上生活の斷
片よ。」とは著者自らの言にして、その眞率痛烈な
る實感に、腸を斷つ思ひあり。泣かんとして泣き
得ず、笑はんとして笑ひ得ざる近代人の苦悶は之
れを著者の歌に見るべし。而も之れ著者が日常生
活の見聞所感、接觸の尊き經驗より得たる生産に
して、その高咏低唱には人間生活の悲喜兩面の生
相燦として鮮かなるものあり。

近代詩歌叢書

第三編

詩集 光る海

人見東明氏著

新型美本
百五十頁
定價卅五錢
郵送料四錢

昨冬「戀ころ」の大著を出して其の足跡を鮮かに
し、獨自の世界を創造して注目焦點を作れる著
者、今や第三詩集「光る海」を出版す。その詩の輝
きは太陽光の如く、その詩の深みはあだかも海底
の如く、沈潜して容易に窺知し難きものあり、而
も自己の生に滲透して飽かず、自己の生を慈育し
て止まざる著者は今や藝術眞境の高潮に達し、は
ちきれんとする生活慾を内面に感じつつあり。本
集はこの間に爛熟せる芳果なり。されば生命の實
相を味はんとする者は來りて本集を繙き煮沸せる
リズムに觸るべし。

近代詩歌叢書

第四編

若山牧水氏著

歌集 秋の落葉

新型美本
百五十五頁
定價卅五錢
郵送料四錢

其の清くして澄めることあだかも秋天の如く、温
きこと春日の如きは之れ即ち著者の人格的精髓に
して、その心情に泌惨せる自然、風物、生相は直
ちに醸してリズムとなり、醱酵して歌となる。純
一不離、清冽豊潤は之れ著者が藝術真境なり、著
者今や「秋風の歌」以後の絶唱數百首を収めて本集
を出さんとす。わか芽の如く優しきリズムに、落
葉の悲しみあり。風の如く澄める節奏に、秋の寂
しさあり。さればこの一片をとりて心耳に聲を聞
かんとするれば、優しき涙頬をうるほし、あたくか
き血潮の胸に湧きかへりわれと吾が心臓に觸るの
感ありを信ず。

1086